

そなえ 八代城に備あり

さつまさかいめ —薩摩境目の城として—

2008年2月15日(金)～3月23日(日)

八代市立博物館未来の森ミュージアム

江戸時代、八代城は「^{さつまさかいめ}薩摩境目の城」と呼ばれていました。つまり、八代城は、薩摩軍の侵攻から国を守る最前線基地に位置付けられ、城下に暮らす人々は、薩摩国との「もしもの戦争」に備え続けていたのです。本展は、「^{さかいめ}境目」という視点から、八代地域のことを考えなおそうというものです。

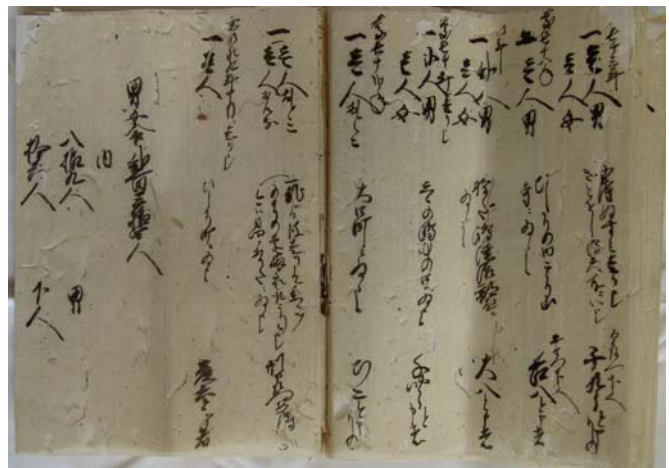


八代城復元模型（本館蔵）

1 ^{さかいめちいき}境目地域の現実

肥後国と薩摩国が敵対関係になったとき、薩摩軍の攻撃をまっさきに受けたのは、薩摩境目の^{あしきたぐん}芦北郡でした。慶長5年（1600）に関ヶ原の戦いが勃発すると、薩摩軍（西軍）は、^{かとうきよまさ}加藤清正（東軍）の領地である^{あしきたぐんさしみき}芦北郡佐敷・田浦に侵攻します。このとき、田浦村の百姓220名が薩摩軍によって^{りやくだつ}掠奪されました。戦時下において、もっとも^{かれつ}苛烈な戦争暴力に^{さら}晒されていたのは、^{こくぐん}国郡の境界に位置する境目地域の村々だったのです。

^{あしきたぐん} 芦北郡之内田浦村百姓治部少乱之時薩州江取越
^{にんずうのちよう}人数之帳



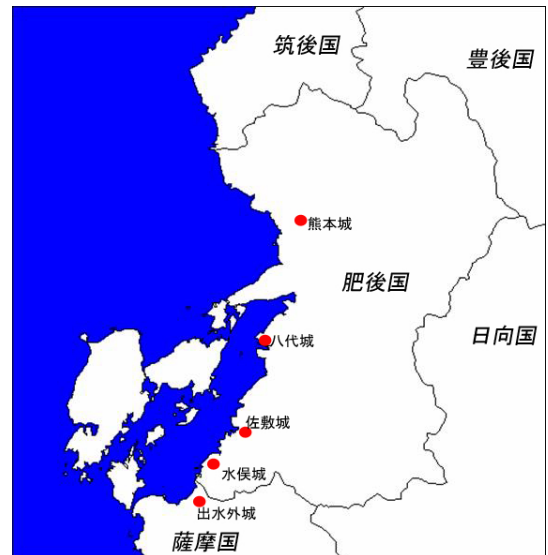
江戸時代前期 寛永10年（1633）4月4日

（財）永青文庫所蔵

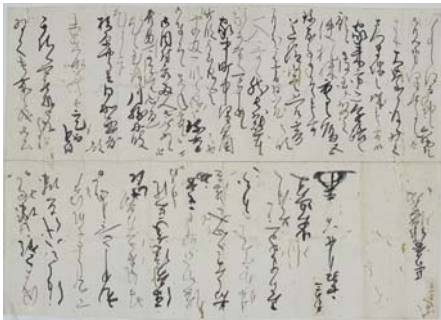
薩摩軍によって^{りやくだつ}掠奪された田浦村百姓の名前、人数、現在の居所を記したものです。田浦村からの村民返還要求を受け、細川藩が作成しました。

2 ^{さかいめ} 境目の城になった八代城

境目地域の城は、敵の侵入をくい止める要^{かなめ}です。もともと肥後国内には薩摩境の城として佐敷・水俣城がありました。しかし、徳川幕府の命令で、慶長 17 年 (1612) に水俣城が、元和元年 (1615) に佐敷城が廃城になると、八代城が薩摩国にもっとも近い熊本藩の城となりました。なお、一国一城令 (1615 年) にも関わらず八代城が残された理由は、はっきりとはわかっていません。「薩摩の押さえ」として残されたという説もありますが、これを証明する一次史料は現在のところ確認できていません。ただ、水俣・佐敷城が廃城になったことで、八代城が幕府や熊本藩から薩摩境目の城と位置付けられるようになったのは確かでしょう。



■ ^{おがさわらただしねしよじょう} 小笠原忠真書状



江戸時代前期 慶安 3 年 (1650) 11 月 28 日
松井興長 宛 (財) 松井文庫所蔵

豊前小倉藩主の小笠原忠真が、八代城代の松井興長に送ったものです。忠真は興長に対し、「八代城は薩摩境の城なので、薩摩国において変わったことがあれば、報告しなさい」と指示しています。

■ ^{からじゅうほう} 大砲 (唐重炮)



江戸時代末期 安政 3 年 (1856) 製造
口径 3.8 cm 砲身長 116 cm
前装式 指火式点火法 青銅製
増田安治郎重益 作 (財) 松井文庫所蔵

八代城に備え付けられていた大砲。八代城代松井章之^{てるゆき}が、武蔵国川口 (埼玉県川口市) の職人増田安治郎に発注して、つくらせたものです。

3 八代城の^{そな}備え

八代城には、数多くの武器・武具が備えられていました。江戸時代末期の記録によると、大砲を含めた鉄砲 483 挺が八代城の櫓^{やぐら}に常備されていたといえます。また、八代城下には、120~130 名の知行取りの武士が常駐していました。彼らは、平時から従者や馬を持ち、戦時に備えなければなりませんでした。また、領国の防衛を担っていたのは武士だけではなくありませんでした。いざ戦争となれば、村の百姓たちも、食糧や武器・弾薬を運ぶ陣夫^{じんぶ}として戦場に赴く義務を負っていました。肥後領国は、百姓を含めた八代地域の人々によって、南の脅威から守られていたのです。

4 松井家の備え

正保3年(1646)から江戸時代が終わるまで、八代城を預かっていたのは、細川藩家老の松井家です。松井家には、さまざまな武器・武具が伝来しています。中でも、くわがた おおうまじるし 鍬形の大馬駈(大将の馬側に立てる目印)は、戦場における松井家のシンボルとして、大切に扱われました。松井家が八代城を預かって以来、八代が戦場になることはありませんでしたが、平和の世にあってもなお、武器・武具に象徴される戦場指揮官としての姿は、松井家の本来の姿であり続けたのです。

まついよりゆきがぞう
■松井寄之画像(部分)



江戸時代前期 延宝5年(1677)

(財)松井文庫蔵

松井家3代目寄之の肖像画。背後に、鍬形の大馬駈が描かれています。この大馬駈は、島原の乱平定戦の戦功として、寄之が藩主細川忠利から拝領したものです。

にしきえ やつしるぐちだいせんそう
■錦絵 八代口大戦争



明治10年(1877) 永島孟斎 作 本館所蔵

八代日奈久沖に上陸した政府軍と、これを襲撃する薩摩軍を描いたものです。

5 八代廃城

明治3年(1870)10月、八代城は廃城となり、その役目を終えます。ところが、その7年後の明治10年(1877)、西南戦争(せいなんせんそう)が勃発します。薩摩軍が熊本方面に進出すると、政府軍はその背後を衝くべく、別働第2旅団を八代日奈久沖に上陸させます。これに対し薩摩軍は、軍勢を八代に送り込み、政府軍を攻撃しました。このため、八代地域は、政府軍と薩摩軍の戦いの場となり、八代の住民は戦火に巻き込まれることになりました。江戸時代を通して、八代地域の人々が危惧(きん)し続けてきたことが、明治時代になって現実のものとなったのです。

おわりに

八代城の歴史はこれで終わったわけではありません。現在では内濠(うちぼり)と石垣(いしがき)の一部を残すのみになりましたが、それは私たちの日常風景として、今もそこにあります。八代城は、境目地域(さかいめちいき)という重厚な私たちの歴史を記憶する場として、今もなお、その姿を留めているのです。



現在の八代城